

学 校 名	山形市立第十中学校 山形市若宮４９番地 TEL ６４３－１２３６ FAX ６４５－８３１５	校 長	長谷川 博明
		研究主任	高 橋 一 彦
研 究 主 題	『一人ひとりに「共に学ぶ力」を』（７年次） ～「共に学ぶ喜び」を体験し、実感できる学びの場の工夫～		
主 題 設 定 の 理 由	本校では平成９年度より平成１３年度まで「一人ひとりに学ぶ力を」という研究主題を設定し「肯定的人間関係（Ａ関係）」の育成に着目した実践研究を行ってきた。特に１３年度はＡ関係から「正義や真理の追求を基にした肯定的人間関係（以後Ａ 関係とする）」への深化を図る研究を行い、次のような成果と課題があげられた。 ○研究テーマの副題にあるように、「交流の場の工夫」を今年度の課題として取り上げ、各教科で「意図的に」仕組んだ交流の場、形態を議論することができた。そのことによって、昨年度の課題であった「交流する場面があればいい」という意識から、より高次の「どのような場面でどのような交流を仕組むか」という意識への第１歩が踏み出せたと考えられる。 ○「共に学ぶ力」を具現化するための１つの要素である「肯定的な人間関係」については学校全体の中に深く浸透している。６年目を迎えた研究の中でこれは大きな成果であると思われる。 ○教科の目指す生徒像を明確にしたことで基礎・基本の確認と指導と評価の一体化が図られた。 ○市教委訪問があり、教職員全員が同じテーマで研究授業を行うことができた。また、忙しい中ではあったが、小研・特研と月ごとにおおよそ実践することができ、教科を越えた実践交流が行えた。 ○総合学習については組織上の問題はあものの、山形市立第十中学校としての総合学習の方向性や１年間を通した流れをつかむことができた。 ●今年度より始まった「総合的な学習の時間」、あるいは「絶対評価に伴う評価観の再構築」などの研究・研修に費やす時間が多くなり、「授業研究」に十分な話し合いの時間を持つことができなかった。従って、研究テーマや研究内容に対し共通理解を図ることが難しく、年間を通した研究活動が行えなかった。 ●「共に学ぶ力」は「Ａ 関係」（正義や真理への追求の姿勢を基にした相互の信頼と尊重の深まり・所属集団への貢献意欲の高まり）という情意的変容を目標としている。しかし、今年度は「正義」や「貢献意欲」という面では満足する変容が見られなかった。生徒は、他を肯定的に認めてはいるものの、積極的に関わりを持とうとせず、与えられた場面によって行動しているにすぎないように感じられる。これは、授業の中だけで解決できるものではない。そのような意味で今年度、１つの柱として取り組む予定であった学級・学年経営について踏み込んだ研究ができなかったことが残念であった。 以上の点を踏まえ、今年度の研究では「共に学ぶ力」を具現化するために、昨年度の課題である「Ａ 関係」を構築するための学級・学年の踏み込んだ研究最終到達目標である、確かな「学力の定着」年間を通した計画的な研究活動を研究目標として、実践していくこととする。 について 「Ａ 関係」（正義や真理への追求の姿勢を基にした相互の信頼と尊重の深まり・所属集団への貢献意欲の高まり）は学級活動や道徳指導の中においても構築されるべきものと考え、今年度の研究の重点に位置づけることとする。 について 「共に学ぶ力」を生徒につけることによって、「真の学力の定着」までをねらうことを今年度の重点に位置づけることとする。 について 今年度は授業研を年間計画の中に盛り込み、外部講師を迎えて研究を推進していくこととする。		
研 究 仮	日常の諸活動で「共に生きる喜び」を体験し、実感できる手だてを図る中で、教科や教材の特質に応じて交流の場面を設定し、以下のような「共に学ぶ喜び」を意識した学習形態を工夫し継続することで、生徒一人ひとりに「共に学ぶ力」が身に付くであろう。 ア）互いの協力が不可欠の要素として学習が進められる場面。		

説	イ) 一人ひとりの生徒が、自分や仲間を欠くべからざる構成員であると感じる場面。 ウ) 互いに関わることで、正義や真理を追求する内的高まりが期待される場面。
---	--

研究内容	研究の領域：A 関係をつくり上げる多面的な取り組み ア) 教科指導（研究の中心課題）…必修教科・選択教科・少人数授業・TT等 イ) 学級・学年経営（研究の補完的役割） 各領域の研究内容 ア) 交流学习の形態の工夫…ペア学習、小グループ学習、町歩き学習、ポスターセッション・バズ学習、ジグソー学習、ディベート学習など、教材や内容に適した交流の形態を追求する。 イ) 学級・学年経営の吟味…班活動や朝会・終会、生徒会活動、清掃などの日常活動、学年集会などに、生徒が主体的に関わりA関係が育まれる経営を追求する。 各教科の研究内容 ア) 研究主題、研究仮説を基にした教科の研究仮説（教科でとらえる生きる力） イ) 教科の各学年で目指す生徒像の明確化 ウ) 教科でとらえる生徒の実態（教科で目指す生徒像との比較） エ) 研究仮説の明確化（研究方法）とその検証方法（評価）の吟味 オ) 教科で考える学習形態のねらいと工夫 学級・学年経営の研究内容 ア) 班活動の充実 …例) 各学年ごとの一斉班長会（学級委員班長合同会）の実施 席替えの方法の検討、1週間の班ごとの目標の掲示 班隊形での朝会・終会、班ノートの実施 班ごとの日直・係活動 イ) 日常活動の充実…例) 朝の会・終わりの会の工夫・諸活動の班での協力の徹底。 ウ) その他 …例) 集団活動を充実させる掲示物の工夫 一人ひとりを大切にする掲示物の工夫 学年集会の生徒を中心とした企画・運営 学級の歌・学年の歌
------	---

研究方法	研究組織 … 研究推進委員 (教頭・教務・研究主任・学習指導部長・武田直・佐藤正) 教科指導 … 授業研の定期的実施→月1回の授業研(グループ参観) 年1回の特研(全職員参観) ・教科のグループ化 → A: 数学・理科・技家 B: 英語・音楽・保体 C: 国語・社会・美術
------	--

研究計画

月	内 容	教科グループ	月	内 容	教科グループ
6 月	グループ研	(英語・音楽・ <u>保体</u>) (国語・ <u>社会</u> ・美術)	1 1 月	全校研	学活・道徳研 (各学年
7 月	グループ研	数学・ <u>理科</u> ・技家		2 学期特研	<u>国語</u> ・社会・美術
9 月	グループ研	<u>英語</u> ・音楽・保体	1 2 月	グループ研	英語・ <u>音楽</u> ・保体
1 0 月	グループ研	数学・理科・ <u>技家</u>	1 月	グループ研	<u>数学</u> ・理科・技家
			2 月	グループ研	国語・社会・ <u>美術</u>